

---

# とある科学の警備ロボ改

軽い雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の警備ロボ改

### 【Nコード】

N1037Z

### 【作者名】

軽い雪

### 【あらすじ】

憑依したのはドラム缶と言われる警備ロボ。

ことあるごとに犠牲となる彼らなのだが、悪の天才科学者（嘘）によって開発された一体に主人公は憑依してしまう。だが、搭載された能力はすげえ物で。

なんだかんだで暗躍する警備ロボのお話。

機体詳細（前書き）

誰得

## 機体詳細

Name【警備ロボット改or村雨】

body 身長、体重等は普通の警備ロボと同じ

どういう訳か、かつこいいロボに生まれ変わりたかったのに警備ロボに憑依してしまった

今作主人公。機体カラーは通常の物とは違う、いかにもな特別仕様。

?通常の三倍?がコンセプトで、本来の予定カラーは赤だったらしい。

頑丈さ、タイヤによる走行スピードが三倍、という事らしい。

血液型は元、O型。性格は陽気で適当。

一度心に炎が灯ると中々消えない。鎮火して。

能力：スマブラXの敵キャラを構成する物質

なんか紫色のマリモのような物で形を形成、武器等を創り出す事が出来る。

武器使用モードでは、腹の部分が上下に展開して若干カッコ良くなる。多分。

反動もどつちやら打ち消してくれるようなので便利。

## 機体詳細（後書き）

村「俺の物質に常識は通用しねえ。物質名？忘れたんだよ、言わせんな恥ずかしい」

雪「確か影蟲みたいな名前じゃなかったか？」

## まさかのドラム缶

「…できたぞ…ついに…奴らを見返せる…！」

ここは学園都市内のある研究所。

その研究所は、主に兵器開発を目的とされた第二学区にあった。

「後は起動テストのみだな…今夜は寝るとしよう。ふふ、明日が楽しみだ…。」

白髪が少し混じった、何処にでもいるよう白衣を着た中年男性は兵器開発のメンバーの一人。

目に隈が出来ているところを見ると、徹夜だったらしい。体大事にしろよ。

その男はある兵器を秘密裏に開発していた。…否、改造と言えるか。

その改造対象は、部屋の中心部 整備用機械など、機器が密集している場所に、  
見えないように隠してあった。

その形状はドラム缶のような筒状の形で。

カラーはグレー、レンズの色は蒼。

学園都市に蔓延る警備ロボットだった。

通常とはカラーが違うという点を除けば、ただの警備ロボットだが…。

ブオン、とレンズに光が灯り。

「警備ロボット改」が起動した。実に安直な名前である。

先ほどの研究者の意図せずに、である。

足と思われる部分に付いたローラーでスムーズに動き出したそれは、

その夜、その施設から逃走した。

我輩は警備ロボットである。仕事はしてない。  
気が付いた時は知らない天井どころか、知らない部屋であったのだ  
が…。

すいんすいんすいん。

「な、なんだって…。確かにロボにしてくれとはお願いしたが…こ  
れは酷い。」

鏡を見てみてもそこに写るのはドラム缶のようなロボ。

つまりは俺、カッチョイイロボなんてことはなく、警備ロボに  
転生してしまったわけである。

…ん、でもどつちかといえは憑依なのか？  
製作者いるみてえだし。

まあこの際どちらでもいいのだが、と俺は展示ガラスに映る自分の  
姿を見ながら、呟いた。

因みに喋れる。理由はしらねえ。でも損はしないし大歓迎。  
警備ロボでなければ手放して喜べただろうが。…清掃よりましか。

我輩は警備ロボット。名前は村雨と言う。  
前世でトラックに轢かれ死亡したのだが、どうやらそれが神様のミ

スだったらしく、

「お詫びに能力付けて本の世界に飛ばしてあげるよ」という提案に従い、今に至るといっわけである。

因みに、人間では無く「おら、心を持ったたかっけえロボになりてえ！」とお願いしたのだが。

先程も述べたようにお願いした結果がこれなのだ。無様ね。

この世界が「禁書目録」の世界であった事は良いとして。

せめて、ガトリングレールガンやら、パワードスーツやらになりたかったのだが、いまさらその贅沢も言えない。

「まあ、こうして喋れるだけましって所か。」

設計コンセプトは「通常の三倍」らしい。何処の赤い彗星だ。

「速さ」「頑丈さ」においてだそうで、確かにほかの警備ロボよりスイスイ進めるのだろう。

原作でも全然速い方だったと記憶するが、彼らは余り登場していない。

所詮、やられキャラである。

電撃の槍を浴び、イコールスピード絶対等速に壊され…。

レベルアップでも確か警備員の盾にされていたはずだ。

カラーリングは赤のほうが良いと思ったが、生憎、赤色の部分はない。

然し、それは例の研究者が開発した部分。

俺には…正確には俺の？中身？が圧倒的に違う。

俺の中身、亜空間なのだ。

この能力が出た原作はスマッシュブラザーズX。

あれだ、兎に角中身が四次元ポケットで、いろいろモンスターが出る奴。

腹ん中に紫色のマリモみてえなのがうじゃうじゃしてやがる。きめえ。

それが集まり、形を成す。というわけだ。

…お、ということとは兵器が作りだせんじゃね？

ガトリングレールガンそのものになる事は諦めるしかないが、ひよつとすれば作り出せるかもしれない。

…というか武器を取り出す事は出来た。

アニメの超電磁砲で一度だけだった気がするが、警備ロボが変形した所がある。

まあ、そんな感じで、収納された腹みたいな部分が展開する。その腹から、作り出した武器を発射する、というわけらしい。役に立つ能力がこれかよ、物騒だな。

しかもカラー的に目立つし。

「ねえ、見てあの警備ロボット、色が違うわ！」

「うわ本当！新型かしら？」

いつの間にか好奇心旺盛な若者達に囲まれていた。仕方無しによく滑るように動くタイヤを動かし、その場を退場するのであった。

途中で我らが同胞の清掃ロボに乗ったメイドさんへ乗り換えられそうになったが、

ここは自慢のスピードに逃げ出した。

目がランランと輝いていて、ロボなのに寒気がした。

「なんだ警備ロボかー。」

なんかがつがりしてらっしゃったけど。

彼奴は只者では無いと感じた、というか例の多重スパイの妹様ではないか。

清掃ロボの動きを掌握しきっている彼女 土御門舞夏。

出来れば暫く会いたく無いな、乗られたらどうなるかわからねえ。

相変わらず絶好調な滑りのタイヤ。すっいんすっいん。

現在、俺は目立つ商店街や店の集まる通りから離れ、例の公園まで来ていた。

我らのヒーロー、上条さんの札を見事に飲み込んだあの自動販売機がある場所だ。

夏休みと言えど、人の出入りは疎らでこの公園の広さも相まってか人気をあまり感じない。

ガタン、と公園の入口の段差を強引に乗り上げて中に入る。

「ふむ…、暇を持て余す。」

避難した所でやる事のない俺だった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1037z/>

---

とある科学の警備口ボ改

2011年12月3日22時50分発行